東京学芸大学リポジトリ
Tokyo Gakugei University Repository

言語文化における古典と小説の融合：『平家物語』を素材として

メタデータ	言語:
	出版者: 東京学芸大学附属高等学校
	公開日: 2024-04-23
	キーワード (Ja): 言語文化, 小説, 古典, 『平家物語』, 主体的に学習に取り組む態度　, 観点別評価, ETYP: 教育実践
	キーワード (En):
	作成者: 明田川, 綾乃
	メールアドレス:
	所属: 東京学芸大学附属高等学校
URL	http://hdl.handle.net/2309/0002000357

東京学芸大学附属高等学校紀要　61　pp. 7 ～18，2023

言語文化における古典と小説の融合

－『平家物語』を素材として－

Fusion of classic and novel fields in Language Culture
－ Using The Tale of the Heike －

国語科　明田川　綾　乃

＜要旨＞
2022 年度から改訂された新学習指導要領により、高校１年生の国語において「言語文化」という科目が新設された。それに伴い本実践では、『平家物語』を素材として、「言語文化」における「古典分野」と「小説分野」の授業の融合と、「古典」と「小説」の両分野における「主体的に学習に取り組む態度」の評価を目指した。最終的な生徒の課題は、古典と小説の授業を通して「『平家物語』における「死」の描かれ方を考察する」というものである。「古典」の授業では、「木曽の最期」について内容読解を中心に授業を行い、『平家物語』読解の基盤をつくった。その後「小説」の授業において木曽義仲以外の人物の場面を読み、グループワークや調べ学習を通して考察を深めていった。課題はルーブリックによって評価し、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行った。

＜キーワード＞　言語文化　小説　古典　『平家物語』　主体的に学習に取り組む態度　観点別評価

1　はじめに

1－1　研究の背景と目的

2022 年度から高等学校の学習指導要領が改訂され、2022 年度入学の高校１年生から適用された。新学習指導要領において新設されることとなった「言語文化」は、以下のような目的のもとで実施されている。

⑴生涯にわたる社会生活に必要な国語の知識や技能を身に付けるとともに，我が国の言語文化に対する理解を深めることができるようにする。
⑵論理的に考える力や深く共感したり豊かに想像したりする力を伸ばし，他者との関わりの中で伝え合う力を高め，自分の思いや考えを広げたり深めたりすることができるようにする。
⑶言葉がもつ価値への認識を深めるとともに，生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ，我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち，言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う。[1]

⑴は「知識及び技能」に関する目標、⑵は「思考力・判断力・表現力等」に関する目標、⑶は「学びに向かう力、人間性等」に関する目標を示したものである。「古典」と「小説」という二つの分野の学習を通して、上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化の理解を深めていくことが目標である。また、成績評価についても、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の３観点の評価が必要となった。

本研究の出発点としては、別物になりがちである「古典」と「小説」を融合し、言語文化のつながりを体験させたいということであった。１学期と２学期においては、「言語文化」という科目でありながら、「古典」と「小説」を意識的につなげることができず、評価についても手探りの状態であった。定期考査は「古典」のみで実施し、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」については「古典」の定期考査による点数で評価をつけ、「主体的に学習に取り組む態度」については、「小説」のレポート課題により評価をしていた。

このような状況を改善するため、３学期は次の２点を目指し、今回の授業を発案した。１点目は「古典分野」と「小説分野」の融合である。「言語文化」という一つの科目として、「古典」と「小説」を交わらせることを目的とした。２点目は、「古典」の授業における「主体的に学習に取り組む態度」の評価である。1、２学期は主体性の評価を「小説分野」中心で行っていたが、今回の授業では、「古典」と「小説」を合わせた主体性をはかることを目的とした。

1－2　言語文化の授業概要

まず、授業の現状についてである。本校の「言語文化」の授業は、「古典分野」と「小説分野」は別の教員が担

当している。3単位の「言語文化」の授業のうち、2単位は古典の教員が「古典」の授業を行い、1単位は現代文の教員が「小説」の授業を行っている。そのため、古典と現代文という専門性の確保はできている。一方で、担当教員が異なるため、「古典」と「小説」はどうしても別物として扱われてしまいがちである。

次に、評価の現状についてである。「知識・技能」については、「古典」の定期考査における「知識・技能」に関する問題の点数により、A、B＋、B、B－、Cをつけた。「思考力・判断力・表現力」については「古典」の定期考査における「思考力・判断力・表現力」の点数により、A、B＋、B、B－、Cをつけた。「主体的に学習に取り組む態度」については、「小説」のレポート課題を5段階で評価した上で、「古典」の提出物の提出状況や授業態度を考慮して、A、B＋、B、B－、Cをつけた。3学期は今回の取り組みにより、「古典」と「小説」融合のレポートにより5段階で評価を行った。

2　単元について

2－1　実施時期・対象生徒・単元名

実施時期：3学期1月～2月
対象生徒：高校1年生
単 元 名：「木曽の最期」『平家物語』

2－2　生徒観

1学期から2学期にかけて、生徒たちは主に古典文法を学び、この段階では、用言や助動詞について学んでいた。「予習→授業→復習」というサイクルが身についている生徒もいれば、予習が追いついていない生徒もいるのが現状であった。予習復習については足りない生徒がいるものの、古典の学習については意欲的に取り組む生徒が多く、文法だけでなく文章そのものを楽しもうとする姿勢も見られる。また、話し合いなどのグループ活動にも慣れており、戸惑うことなくグループワークができる生徒たちである。

2－3　単元観

『平家物語』は鎌倉時代の軍記物語である。様々な立場の人々の「死」が描かれているが、その「死」は人物によって個性があり、そこにはその人物の「生き様」があらわれている。『平家物語』を単なる文法を学ぶための教材とするには勿体無い。「木曽の最期」だけでは読み取れないたくさんの武将たちの物語があり、登場人物たちの心情や考え、行動を、まさに小説を読むように味わうことができる古典作品である。こういった点において、「古典と小説の融合」という授業がやりやすい単元であると考えた。そこで、本単元では、「古典」の授業において「木曽の最期」を丁寧に読み解き、その後「小説」の授業において『平家物語』における「死」が描かれている他の場面を読むことにした。

2－4　指導観

まず「古典」の授業では、物語やそこに描かれた人々を深く読み取らせることを重視し、文法中心の授業ではなく、内容読解中心の授業とするよう心がけた。「古典」の授業で「木曽の最期」を深く学習することで『平家物語』読解の基盤を身につけさせ、その後のワークシート課題やグループワークを生徒たちだけで読み取り、考察できるよう仕掛けを作った。

「古典」の授業で扱った「木曽の最期」は、木曽義仲と今井四郎兼平、巴の物語である。義仲や今井の壮絶な最期は生徒たちにとっても強烈な印象を残すものである。その義仲の「死」を読み解いた上で、今回は、その「死」の描かれ方が生徒にとっても印象的であろう人物をこちらで5人選び、比較させた。その5人とは、平清盛、安徳天皇、平忠度、平敦盛、能登殿である。いずれも、「死に様」が印象的であり、そこから「生き様」も読み取れるような、個性のある人物たちである。この5人の「死」を読み解くことで「生」を考え、さらには『平家物語』における「死」の描かれ方を考察していく。

2－5　単元の評価基準

本単元の評価基準は以下の通りである。

知識・技能	思考力・判断力・表現力	主体的に学習に取り組む態度
①音便や『平家物語』特有の語りについて理解する。 ②本文中の重要単語や敬語、文法事項についておさえる。 ③装束や合戦方法、武士としての生き様など、中世の文化や常識について理解する。	①木曽義仲、今井四郎兼平、巴といった登場人物の関係性について理解する。 ②それぞれの登場人物の考えや願い、心情の変化などを読み取る。	①「木曽の最期」における義仲と今井の死に様を考察する。 ②『平家物語』の「死」が描かれた場面を複数読み比べ、『平家物語』における「死」の描かれ方について考察し、まとめる。

「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」についてはおおむね定期考査での評価である。「主体的に学習に取り組む態度」については、今回のパフォーマンス課題の内容と、その他の課題の提出状況により評価した。

2－6　単元の指導計画

本単元は、「古典」の授業５時間、「小説」の授業３時間の計８時間をあてた。授業の流れは担当教員によって多少の違いはあるものの、概ね以下の通りに進めた。

１時間目	古典	・『平家物語』の文学史的事項の説明 ・教科書掲載部分以前の内容についての説明 ・音便についての学習 ・本文読解（義仲の装束や名のりについて理解する）
２時間目	古典	・義仲、今井、巴の関係性についての説明 ・重要単語をおさえる、本文読解（現代語訳） ・義仲と巴のそれぞれの思いを読み取る
３時間目	古典	・本文中の敬語をおさえる、本文読解（現代語訳） ・今井の言葉の嘘と本当の気持ちを考える ・義仲の心情を考える
４時間目	古典	・本文中の敬語と重要単語をおさえる、本文読解（現代語訳） ・今井の心情と行動を理解する
５時間目	古典	・義仲が敵の手にかかった理由をおさえる ・今井が自害した理由を考える ・義仲と今井の死に様を整理する
６時間目	小説	・各自でワークシート①を読む ・各自でワークシート②に取り組む ・班でワークシート②について話し合う
７時間目	小説	・ワールドカフェ形式でグループに分かれ、自分が担当した人物について説明する ・そのグループのままワークシート③の各問いについて話し合う
８時間目	小説	・ワークシート③の話し合いの続きを行い、発表に向けて準備をする ・各班２分で発表を行う ・教員による最後のまとめ

3　授業実践Ⅰ（古典）

「古典」の授業では、1月から2月にかけて「木曽の最期」の読解を行った。5時間の授業時間で、教科書掲載部分の読解を行った。単語と文法をおさえつつも、登場人物の心情読解に主軸を置いた。

以下、発問例である。

発問	解答例
義仲の装束の特徴は何か。	大将軍にふさわしく華麗で立派な鎧装束。
ぶつかっては突き抜けて、どんどん先へ行く義仲の狙いは何か。	最期の時が来るまでぶつかっていく。勝つことではなく戦うことが目的。
義仲が巴に強い口調で戦線離脱を命じる真意は何か。	巴を共に死なせたくない。愛する巴には生き延びてほしい。
巴の心情を考えよう。	義仲のもとを離れたくない。最後に自分の勇姿を義仲に見てほしい。
今井の気持ちを整理しよう。	義仲には立派な最期を遂げてほしい。
今井の行動は何を目的としているか。	大声をあげて名乗り、敵を怒らせることで、敵を自分に引きつけ、義仲が自害する時間稼ぎをしている。
今井が戦闘を停止したのはなぜか。	義仲のために自分は生きて戦ってきたのだから、義仲の一生が終わった時に自分の一生も終わると考えていたから。

以上のような発問により、当時の武士たちの価値観や主従の絆の強さを感じ取れるような仕掛けづくりを行った。これにより、『平家物語』を読む基盤をつくり、教員の解説がなくても、生徒自身で深い考察に入っていけるようにした。

4　授業実践Ⅱ（小説）

4－1　『平家物語』の比較読み

5時間の「木曽の最期」の授業を終え、現代文の教員にバトンを渡し、「小説」の授業で『平家物語』を読ませた。あくまで「小説」の授業であるため、生徒には原文ではなく現代語訳を読んでもらい、古文の読解ではなく、内容や心情読解に集中できるようにした。その一方で、本文中における印象的なセリフについては古文のまま味わってほしいと考え、一部原文も記載した。以下が取り上げた場面である。

⑴「入道死去」（平清盛の死）

＜場面概要＞

栄華を築いた平清盛が、いわゆる「あっち死に」をする場面である。清盛が熱さに苦しむ場面や、二位殿に遺言を残す場面を選んだ。

＜選んだ理由＞

生徒全員が知っているであろう平清盛が、「あっち死に」という死に方をしたということが生徒に強烈な印象を残すと考えた。大げさなほどの熱さの表現が、古典らしい表現であり、味わってほしい箇所であった。また、二位殿に残した遺言は頼朝を殺せなかった未練を述べたもので、本文には「罪深い」という表現が複数見られる。ここに仏教的な思想が見られることからも、この場面を選択した。

＜読み取らせたかったこと＞

①義仲との比較

義仲も清盛も自分が望むタイミングでの死ではなかった。死を喜ぶ者もいれば悲しむ者もいた。一方で、義仲には続いて自害してくれた従者の存在があったが、清盛にはいなかった。

②清盛が「罪深い」と言われた理由

平家が滅びたのは、平家の悪行の累積によるという語り方がされている。悪因悪果の因果思想によって『平家物語』における平家一門の滅亡が展開している。

⑵「敦盛最期」（平敦盛の死）

＜場面概要＞

源氏方の熊谷次郎直実が、平敦盛が波打ち際の方へ逃げていくのを見つけ、息子と同じくらいの年齢の敦盛を殺すことに躊躇いつつも、敦盛の首をとる場面である。敦盛の死を悲しむ人々や直実の出家なども描かれる。

＜選んだ理由＞

敦盛は「年十六、七ばかり」であり、生徒たちとも同年齢である。自分と同じくらいの若者が、堂々とした態度で敵と向き合う姿を味わってほしいと考えた。また、敦盛を殺すことを躊躇う直実の心情や、敦盛の死が悲しまれた理由についても考察しがいがあると考え選択した。

＜読み取らせたかったこと＞
①義仲との比較
討死をするという点や堂々とした態度に共通点がある一方、敦盛は敵方に助けたいという気持ちを起こさせ、敵方に影響を与えたという点が大きく異なる。また、敦盛は笛を持っており、優雅で高貴な貴族という側面が見られるのも大きな違いである。
②敦盛が海から戻ってきた理由
決して敵から逃げない敦盛の武士としての誇りが読み取れる。武士としての誇りを最後まで保つことが生き延びるよりも大事だと考えていたことがわかる。「立派な死」への執着心が読み取れる。

⑶「忠度都落ち」「忠度最期」（平忠度の死）
＜場面概要＞
平忠度は、藤原俊成を師とする歌人でもあった。「忠度都落ち」は、一度都から離れた忠度が、俊成のもとへ戻り、勅撰集への入集をお願いする場面である。「忠度最期」は、忠度が敵方に討たれる場面である。討った相手は、忠度だとはわからなかったが、和歌が書かれた文を見て、忠度を討ったことに気づく。

＜選んだ理由＞
鎌倉時代の武士というと、どうしても芸術とは無縁のように思えてしまうが、特に平家たちは、和歌や管弦などを嗜んでいた貴族たちである。この場面はそのことに気づける場面である。また、忠度は死に際しても和歌を肌身離さず持っており、最期まで歌人であることを誇りとしていた。まさに「死に様」から「生き様」がうかがえる人物である。

＜読み取らせたかったこと＞
①義仲との比較
敵方に討たれたことは共通しているが、忠度は死への準備が周到であった。戦で死ぬことを見越して俊成に和歌を託し、最後まで和歌を持参していた。今際の際にも、念仏を唱え、仏教への信仰も見られる。
②忠度と俊成の心情
朝敵となった忠度は、勅撰和歌集に和歌を入れてもらうのが非常に難しい立場であり、忠度も俊成もそれはよくわかっている。その上で、一度都から離れたにも関わらず戻ってきた忠度の和歌への想いや、その忠度に感銘を受け約束する俊成の想いを読み取らせたい。

⑷「能登殿最期」（平教経の死）
＜場面概要＞
能登殿は、壇ノ浦の合戦に際し、今日を最後と思い、多数の者をやみくもに討ち殺す。平知盛に罪作りだと諌められると、3人の敵方を道連れに、海へと飛び込む。

＜選んだ理由＞
生徒がイメージするような勇猛な武士の姿が描かれている。また、ヒーローのようなイメージの強い義経が能登殿に追われて逃げる場面も、生徒に何か印象を残すのではないかと考えた。また、知盛の「罪作り」という言葉も、平清盛のエピソードと合わせて仏教に関する「罪」についても考察できるのではないかと考えた。

＜読み取らせたかったこと＞
①義仲との比較
自身の最期を自覚しながらも、大音声をあげて名乗る堂々とした態度が共通している。一方で、義仲は一人で自害したのに対し、能登殿は敵方を道連れにしている。
②最期まで戦いをやめない能登殿の心情
最後に大将軍を討ち取って少しでも名誉としたい、どうせ死ぬならたくさんの者を道連れにしたい、自分の死に様を見せつけたい、といった心情を読み取らせたい。

⑸「先帝身投」（安徳天皇の死）
＜場面概要＞
平家方の敗北が確定したところで、二位殿は安徳天皇を抱えて入水する。安徳天皇は幼いながらも念仏を唱え、二位殿と立派に入水を遂げる。

＜選んだ理由＞
幼い安徳天皇の言葉や、安徳天皇を励ます二位殿の心情に胸を打たれる。「平家」の最後を象徴するような場面であることからこの場面を選択した。

＜読み取らせたかったこと＞
①義仲との比較
安徳天皇と二位殿の絆は、義仲と今井の絆にも通じるものがある。主従の固い絆と家族の固い絆を感じられる。
②二位殿と安徳天皇の心情
二位殿の言葉や行動には、三種の神器を守り、来世に希望を持たせようとする強さがうかがえる。その一方で、安徳天皇を励まし、死への恐怖を和らげようとする二位殿の優しさも読み取らせたい。

4－2　グループワーク１

「小説」の授業の第１時間目（全体の６時間目）にグループワーク１を行った。授業の流れは以下の通りである。

①各クラス、４人× 10 班に分ける。
②それぞれの班に前述した５人の人物を割り振る。
（同じ人物に当たる班が２班ずつできる。）
③個人でワークシート①を読む。
④グループで話し合い、ワークシート②を書く。

＜ワークシート①（「先帝身投」の例）＞

「平家物語」に描かれる「死」について考えよう①

先帝身投（安徳天皇の死）

源氏の軍兵どもは、もはや平家の船に次々に乗り移ったので、船頭・水夫どもは、射殺されたり斬り殺されたりして、船を正しい方向に向け直すことができず、船底に倒れ伏していた。**新中納言**・**知盛卿**は小船に乗って御座所のある（安徳天皇が源氏たちから逃れて乗っている）御船に参り、

「世の中は今はこれまでと見えました。見苦しいような物などを、みんな海へお投げ入れください」

といって、船の前後に走りまわり、掃いたり、拭いたり、塵を拾って、自分の手で掃除なさった。

女房（世話役の女性）たちは、

「中納言殿、戦いはどうですか、どうです」

と口々にお尋ねになると、知盛は、

「珍しい東国の男（源氏のこと）をご覧になることでしょうよ」と言って、からからとお笑いになるので、

「こんなにさしせまった今となって、なんという冗談でしょう」

といって、口々に大声でわめき叫ばれた。

二位殿（安徳天皇の祖母で、平清盛の妻）は、このありさまを御覧になって、日頃からかねて覚悟していられたことなので、濃いねずみ色の二枚重ねを頭にかぶり、練絹の袴の股立を高くとって、神璽（三種の神器のうちの一つ）を脇にかかえ、宝剣（これも三種の神器の一つ）を腰にさし、天皇をお抱き申し上げて、

「わが身は女であっても、敵の手にはかからないつもりだ。天皇のお供に参るのだ。君（天皇）に対しお志を寄せ深くお思い申し上げていられる人々は、急いであとに続きなさい」

といって、船ばたへ歩み出られた。**天皇**は今年八歳になられたが、お年の頃よりはるかに大人びていられて、御顔かたちが端麗であたりも照り輝くほどである。御髪は黒くゆらゆらとして、お背中より下にまで垂れておられた。驚きあきれたご様子で、

「**尼ぜ、われをばいづちへ具してゆかむとするぞ**」

（尼ぜ、私をどちらへ連れて行こうとするのだ）

と仰せられたので、**二位の尼**（**二位殿**）は幼い君にお向かい申して、涙をこらえて申されるには、

「君はまだご存じございませんか。前世で十善の戒を守り行った（修行した）お力によって、今天子とお生まれになりましたが、悪い縁にひかれて、ご運はもう尽きておしまいになりました。まず東にお向かいになって、伊勢大神宮にお暇を申され、その後西方浄土の仏菩薩方のお迎えにあずかろうとお思いになり、西にお向かいになって、お念仏をお唱えなさいませ。この国は要散辺地といって、悲しいいやなところでございますから、極楽浄土といって結構な所へお連れ申し上げますよ」

と泣きながら申されたので、**幼帝**（**天皇**）は山鳩色の御衣に角髪をお結いになって、御涙をはげしく流されながら、小さくかわいらしい御手を合わせ、まず東を伏し拝み、伊勢大神宮にお暇を申され、その後西にお向かいになって、お念仏を唱えられたので、**二位殿**はすぐさまお抱き申し上げ、

「**波の下にも都のさぶらふぞ**」

（波の下にも都がございますよ）

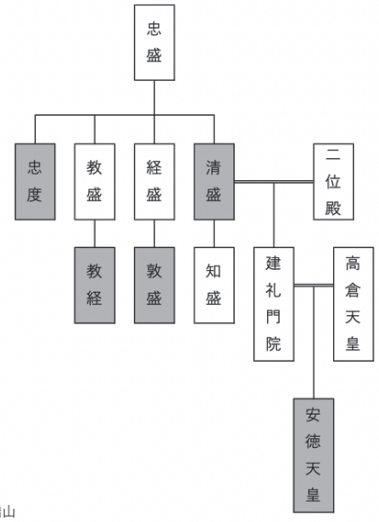
とお慰め申し上げて、千尋もある深い海底へお入りになる。

悲しいことだ。無常の春の風が、たちまち花のような帝のお姿を吹き散らし、情けないことだ、六道をめぐる人間の静止の荒い波が押し寄せ、海の荒波が天子の御身体を海中へお沈め申し上げる。御殿を「長生」と名付けて長い住みかと定めて住み、門を「不老」と称して老いることのない門と書いてあるが、まだ十歳たらずで、海底の水屑となってしまわれた。十善の帝位にある方のご運のつたなさはなんとも申しようもないほどである。雲の上の竜が下って海底の魚となりになる。梵天王の高い宮殿の上、帝釈天の喜見城の宮殿の中のような、内裏の宮殿に住まれて、昔は大臣・公卿に取り巻かれて平家一門の人々をなびき従えておられたが、今は船の内に過ごし、身投げして波の下に御命をたちまち滅ぼされたのは悲しいことであった。

＜ワークシート②（「先帝身投」の例）＞

「平家物語」に描かれる「死」について考えよう②

◎系図（今回取り上げる話に関係する人物のみ。大幅に省略しています。）



◎年表（「平家物語」における主要な出来事）

安元三年（一一七七）鹿ヶ谷の陰謀
治承四年（一一八〇）福原遷都
治承四年（一一八〇）石橋山の戦い
治承四年（一一八〇）木曽義仲の旗揚げ
治承四年（一一八〇）富士川の戦い
治承五年（一一八一）平清盛死去
寿永二年（一一八三）倶利伽羅峠の戦い
寿永二年（一一八三）平家都落ち
寿永三年（一一八四）宇治川の戦い
寿永三年（一一八四）粟津の戦い
寿永三年（一一八四）一ノ谷の戦い
寿永四年（一一八五）屋島の戦い
寿永四年（一一八五）壇ノ浦の戦い

「入道死去」
「忠度都落」
「木曽最期」
「敦盛最期」・「忠度最期」
「先帝身投」・「能登殿最期」

ワークシート　安徳天皇

（1）年（　）組（　）番　名前（　　）

(1)「木曽の最期」の登場人物を整理しよう

(2)「木曽の最期」の登場人物の死に方

(3)「先帝身投」を読み、登場人物の関係を整理しよう

(4)安徳天皇の死に方を説明しよう

(5)「先帝身投」を読み、義仲の死との共通点・相違点をまとめよう

(6)二位殿が安徳天皇に語った言葉の意図について考えよう

(7)その他・疑問に思ったこと・感想　話し合ったことがあれば書こう

4－3　グループワーク２

「小説」の授業の第２時間目（全体の７時間目）にグループワーク２を行った。授業の流れは以下の通りである。

①ワールドカフェ形式で前回の班をランダムに混ぜた班を作る。
　各班に５人の人物の担当者が全員いるように、５人×８班を作る。
②グループのメンバーに、自分が担当した人物やお話の内容について説明する。
③そのグループのままワークシート③の内容を話し合い、ワークシートに記入する。

＜ワークシート③＞

「平家物語」に描かれる「死」について考えよう③

（1）年（　）組（　）番　名前（　　）

(1)各話の担当者は、自分の担当の物話を班員に説明しよう

(2)各話の登場人物を「自害」「討ち死に」「病死」で分け、死ぬときの感情がそれぞれどのように異なるか、班で話し合いながらまとめよう。

(3)「仏教」「罪」というキーワードが出てくる箇所を探し、登場人物それぞれの死に仏教がどのように影響しているか、班で話し合いながらまとめよう。

(4)人々から特に死を惜しまれた描写があるのは誰だろう？　それは何故だろう？　班で話し合ってまとめよう。（複数可）

＜ワークシート③の想定される解答＞
問：各話の登場人物を「自害」「討ち死に」「病死」で分ける。死ぬときの感情がそれぞれどのように異なるか。
・自害：能登殿・安徳天皇
　能登殿は武士としての堂々とした自害だが、安徳天皇は悲しんでいる。
・討ち死に：義仲・忠度・敦盛
　不意の死なので無念な思いがあるかもしれない。敦盛は自ら「首をとれ」と言い覚悟があるように感じる。
　忠度も俊成に和歌を託したことで、もう悔いはないのではないか。
・病死：清盛
　清盛も不意の死で、完全に思いを遂げてからの清々しい死ではない。頼朝への悔いがある。

問：「仏教」「罪」というキーワードが出てくる箇所を探す。登場人物それぞれの死に仏教がどのように影響しているか。
・念仏を唱えて死を迎えた人：敦盛・安徳天皇・忠度
・罪作りだと周囲から言われた人：清盛・能登殿
「殺生」は罪だと考えられていたことがわかる。念仏を唱えることで極楽往生を願った。

問：人々から特に死を惜しまれた描写があるのは誰だろう？それは何故だろう？

・忠度と敦盛

理由：和歌や管弦の才能があったから。

平家の人々は決して戦だけの人生ではなく、和歌や管弦など、芸術を好み嗜んでいた人も多くいた。戦場にも楽器や和歌を持ってきていたこと、最期まで和歌や管弦を忘れず気にかけていたことからは、彼らの生き様がうかがえる。

4－4　発表とレポート課題

「小説」の授業の第３時間目（全体の８時間目）に発表を行った。授業の流れは以下の通りである。

①前回のグループでワークシート③についての発表準備を行う。
②各班２分で全班ワークシート③で話し合った内容を発表する。
③教員から総括を行う。
④授業終了後、１週間程度でレポート課題（ワークシート④）をまとめる。レポート課題（ワークシート④）は、グループで話し合ったことをもとに、個人で仕上げ、提出する。

＜レポート課題（ワークシート④）＞

「平家物語」に描かれる「死」について考えよう④

（1）年（　　）組（　　）番　名前（　　）

課題　『平家物語』において「死」はどのように描かれているか。二百字以内で論述せよ。

提出日：　　月　　日（　　）

評価	評価軸
1	登場人物同士を比較することができていない。未提出。
2	登場人物の死に様を比べることができているが、単純に死に方を比べただけで、表面的な比較に留まっている。
3	登場人物の死に様を比較した上で、生き様についてまで深く考えることができているが、誤読や飛躍、説明不足などが見られる。
4	登場人物の死に様を比較した上で、生き様についてまで深く考えることができており、的確に説明することができている。
5	4に加え、自ら調べたことを付け加えるなど、独自の視点が見られる。

5　評価について

5－1　ルーブリック

評価ルーブリックは以下の通りである。

5(A)	4に加え、自ら調べたことを付け加えるなど、独自の視点が見られる。
4(B+)	登場人物の死に様を比較した上で、生き様についてまで深く考えることができており、的確に説明することができている。
3(B)	登場人物の死に様を比較した上で、生き様についてまで深く考えることができているが、誤読や飛躍、説明不足などが見られる。
2(B-)	登場人物の死に様を比べることができているが、単純に死に方を比べただけで、表面的な比較に留まっている。
1(C)	登場人物同士を比較することができていない。未提出。

5－2　生徒のレポート課題より

生徒が提出したレポート課題（ワークシート④）の例を以下に記載する。

＜生徒Ａ＞
平家物語の自害の在り方について考える。その根底に私は人の二つの大きな感情の相違を感じた。一つは死に対する単純な恐怖、そして二つ目は誇りである。安徳天皇が泣く姿には幼い子供の存在を介して人間の本来の姿が、そして能登殿の自害する姿には死ぬ瞬間さえも晴れ舞台にする強さが表れている。平家物語で「死」は本能に屈せず己を殺し、自分が自分であるための最期の見せ場として、美しく、かつ力強く描かれている。

＜生徒Ｂ＞
全員に共通していることは死の瞬間について考えられているわけではなく、後の事柄を基に死ぬ前の言動が伴っているということである。しかしその言動はそれぞれの人物によって異なり、清盛なら頼朝の首を墓に持ってきて欲しいと伝える、安徳天皇や忠度なら念仏を唱えるなどとなっている。死という瞬間を恐れ少しでも長く生きようと考える現代人に対して、平家物語の時代を生きた人々にとっての死は言わば通過点として描かれている。

＜生徒Ｃ＞
『平家物語』では「死」が武士と人間の二面性から描かれている。敦盛は最期まで武士として堂々とした姿で描かれている。一方で、清盛は最期に思い残すことはないと言いつつ、内心では頼朝に対して心残りがあり、この矛盾を通し、人間の機微が描かれている。このように、様々な人物の「死」がその人の武士としての強さと人間味を帯びた部分を象徴することにより、人物の死に向かうまでの生き様を表している。

＜生徒Ｄ＞
まず、平家物語が一部を抜き出して語られたことを反映して盛大な死の描写が行われている。それに加えて、仏教の考えを暗に示している。罪深き清盛は後悔を残したまま壮絶に死んだ。一方、念仏や、仏徳をたたえるため仏教と伝来した詩歌管弦を残したり、罪づくりをやめた各氏は覚悟をもって死ぬことができた。これらの死は病死から討死に、自害に発展しながら、仏教の「無常観」を象徴するとともに、「罪」への考え方を色濃く示している。

5－3　評価の実態

評価は先に示したルーブリックにもとづいて行った。5（A）が取れた生徒は各クラス10名程度、4（B+）は15名前後、3（B）は15名前後、2（B-）と1（C）は学年全体で数名であった。クラス間で人数比に大きな差が出ることはなく、どのクラスも概ね同じような分布となった。

全体的には、課題の通りに、「死に様」を比較することで「生き様」を読み解いた生徒が多く見られた。クラスによっては、「小説」の授業を担当した教員の特色なども見られ、「仏教」をテーマに書く生徒が多いクラスなども見られた。200字以内ということで、書きたいことがたくさんある中、字数以内でまとめることに苦戦した跡が見られる生徒も多かった。特に、自ら調べたことを盛り込もうとすると200字では足りず、この字数でルーブリックにおける「5」の評価を取ろうとするのは難しく感じたかもしれない。一方で、話し合ったこと、調べたこと、考察したこと、といったように、材料がたくさんある中で、それらを取捨選択して200字以内でまとめるという、「書く力」や「要約する力」も見ることができたと言える。

6　まとめ

6－1　効果的であった点

本活動において、効果的であったと考えられる点は以下の４点である。

第一に、内容読解重視の古典の授業ができたという点である。単語や文法の学習にどうしても時間を割かなければならない「古典」の授業を、「小説」に移動させることで、古典作品の内容をより深く考えさせることができた。グループワークやレポート課題というのは、「古典」の授業だけでは時間が取れず、「小説」の授業で補うことでじっくり考えさせることができた。

第二に、「古典」の授業で先に「木曽の最期」を読んだ点である。「古典」の教員の授業によって『平家物語』読解の基盤を作ったことは非常に重要な点であったと考える。どのように武士たちの行動を解釈し、心情を読み取っていけば良いのかを、木曽義仲を例として示せたことで、生徒たちはその後の活動に抵抗なく入ることができた。

第三に、小説分野で『待ち伏せ』（ティム・オブライエン著、村上春樹訳）という作品を扱っていた点である。この作品は、ベトナム戦争における筆者の「人を殺した」経験が綴られたものである。これは意図したことではなかったが、この『待ち伏せ』という作品と『平家物語』を比較し新たな気づきを得た生徒もいた。『待ち伏せ』では手榴弾で人を殺す描写がある。近現代の戦争では、遠くから自分の身を傷つけることなく人を殺すことができるが、『平家物語』で描かれた合戦はいずれも相手と対面し、自分の手で敵を殺さなければならない。こういった点に気づく生徒がいたことは驚きであった。

第四に、『平家物語』を題材とした点である。『平家物語』は、合戦の作法や主従関係など、生徒には理解しづらい場面が多々あるが、その一方で生徒たちの心を揺さぶるような行動や言葉も至る所にある。そういった武士たちの物語を味わうことで、古典が思ったよりも近いものだと感じることができたのではないだろうか。

6－2　今後の課題

本活動の課題としては、以下の３点があげられる。

第一に、事前準備の煩雑さである。「古典」と「小説」の両分野の授業を通して一つの単元を完成させるため、「古典」の担当教員と「小説」の担当教員の綿密な打ち合わせが必要である。また、「古典」での授業５時間のあと「小説」の授業に渡すため、そのタイミングをうまく調整しなければならない。授業をしながらも適宜授業の進度を報告していく必要がある。

第二に、「古典」の教員と「小説」の教員が互いの授業を見学できていないという点である。本来であれば、お互いに授業を見合うことが望ましいが、時間をつくって見合うことが難しく、その時間をつくろうとすれば教員の負担が増えてしまう。しかし、お互いの授業を見合うことで、授業により一貫性を持たせることができると考える。

第三に、今回の実践は『平家物語』の中だけの比較読みにとどまってしまったという点である。本実践よりも更なる「古典」と「小説」の融合を目指すのであれば、『平家物語』と『待ち伏せ』など、古典作品と近現代の小説の比べ読みなどの活動を行うことで、生徒たちに上代から近現代における言語文化のつながりをより身をもって感じさせることができるのではないだろうか。

6－3　本実践を振り返って

はじめに述べたように、本実践の目的は、「古典分野」と「小説分野」の融合、そして「古典」の授業における「主体的に学習に取り組む態度」の評価であった。「古典」と「小説」の両分野における主体性を評価するという点では、今回の活動は有意義なものであったと考える。一方で、「古典分野」と「小説分野」の融合という点については、まだまだ改善点がある。今後は、古典作品と近現代の小説の比べ読みなど、更なる融合を目指していきたい。

7　主な参考文献および資料

引用文献

⑴文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』（文部科学省、2018年、P.109-110）

参考文献

・文部科学省『高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説』（文部科学省、2018年）
・市古貞次『新編日本古典文学全集（45）平家物語⑴』（小学館、1994年）
・市古貞次『新編日本古典文学全集（46）平家物語⑵』（小学館、1994年）